

担当制を考える

子どもが好きで保育士になりました。
(プラス必要な保育士の能力とは)

子どもにとって良い保育とは

子どもにとってよい保育をするためには、いくつかの、必ず押さえておきたいことがあります。

最も大切なキーワードは＜安心してしている時に子どもたちは、発達していく＞です。

☆保育士は、どうしたら子どもは、安心できるかを知っていなければいけません。

1・生理的欲求が、満たされている。

2・身体的欲求が、満たされている。

3・知的欲求が満たされている。

※年齢的特徴や、個性を理解してもらっている。

担当制の必要性

担当制は、子どもが家でお母さんと過ごすように、園でも過ごせるようにすることです。

幼い子どもは、一人の人から愛されたいと思っているからです。その事で子どもの中に愛着(アタッチメント)が形成され安心感が、できます。

保育園で保育者と子どもの人数を考えた時、いつも同じ保育者が、一人の子どものお世話をする事が、一人の子どもを観察し、子どもの発達や習慣をより深く知ることができます。

子どもの状態をよりよく知る事ができれば、それにふさわしい働きかけもできるようになり、子どもの発達を助ける事ができます。

保育園では、担当の保育士が子どもに安心を提供しているのです。

※乳児にとって情緒的な安心は、とても大切です。情緒的に安定している子どもは、遊び始めます。遊ぶ子どもは発達していきます。

担当制の作り方と時間・空間の条件

どのように担当制を取り入れたらよいのか、その条件、留意点をまとめてみました。

1・入園前面接・慣らし保育

まずは、子どもを知る事から始まります。家庭の状況を聴き、親も数週間園に通ってもらう(慣らし保育)をします。その中でその子どもがどういう子どもなのか、家庭での位置も含めて、親の話や、親子のやりとりの中で知っていきます。睡眠時間・生活に関する自立度、習慣、性格、どのような時に落ち着くのか、どのような事を怖がるか、食べる事に対する要求、食べるテンポなど、家庭では、家庭では、どのような状態なのか、親から聞きます。

また保育園の日課や習慣、ルールなども親に説明していきます。

担当制の条件・留意点

2・クラスの保育士の担当の子どもを決める。

クラスに入る子どもが、把握できたら担当の子どもをそれぞれの保育士で分担します。

できれば月例が、近い方がその後の育児が楽に進みます。

月例が近いことで、保育士1対1でしていた育児も1対2で行えるようになります。時間の経過とともに、子どもの自立して行為できることが増えていくからです。

担当制の条件・留意点

3・育児にたっぷり時間をかけられる日課を設定します。

基本は、子どもの発達やテンポに合わせて丁寧に育児をすることにあります。

外遊びに行く時の着替えも、遊んでいる場から保育士は、子ども1人から2人ずつ誘います。子どもは、保育士に助けられながら、上着を着て靴下をはき靴をはいて庭にいきます。

おむつ交換・トイレも1人ずつ誘いその子ができることを待ちながらできない事を助け、一つ一つの行為をゆっくり言葉で表し

説明していきます。

担当制の条件・留意点

4・育児に時間をかける。

焦る事なく、待たせる事なく、1人ずつの発達の経過、テンポを知り、その子だけに集中します。この事によって、子どもは、より能動的(自分のやるべきこと)に向かえるようになります。子どものできる事が、増えてきて、保育士が直接手をかけて助ける必要がなくなっても、見守り、曖昧な動作を言葉で説明していきます。そのためにも、育児の時間を十分にとります。

1人の保育士が遊びをみる事になるので、育児時間を遊びや他の行為と並行行えるように日課を作ります。

担当制の条件・留意点

5・順番を決める。

月齢や睡眠・食事に関してどの子にどのような生理的欲求があるのかを知り、最初に育児を始めるのは、A保育士の担当の一番目はaちゃん・二番目はbちゃんと順番を決めていきます。トイレは、多少の援助が必要でもオムツの外れた子どもであれば、2人ずつ誘えるようになります。

遊び・トイレ・食事・睡眠の流れが、自分の順番も含めて、毎日繰り返すことで、子どもは、行為の見通しもつくようになり、

Aちゃんが終われば(わたし・ぼく)の番ということを理解していきます。

担当制の条件・留意点

6・流れる日課(規則正しい生活リズム)

保育園に通う子どもたちにとって、最も大切なのは、流れる日課です。なぜかという、流れる日課は、保育園で過ごす子どもたちに安心感や、落ち着いた雰囲気を提供します。毎日の生活が、同じように繰り返され、次にどんな行為をし、自分の順番が、いつ回ってくるかが分かれば、それは子どもに安心を提供し、子どもがその場に適応することを助けます。

担当制の条件・留意点

8・流れる日課とは。

1日の中で子どもたち、いろいろな行為をします。流れる日課とは、1人の子どもの行為と全体がスムーズに流れる、つまり不必要に待つ時間がない、行為が中断されない事を意味します。流れる日課の中で生活している子どもは、自分はどのような行為をするのか、どんな活動をするのか分かっています。次の出来事が分かるという事は、子どもに安心感を提供します。保育園も家庭に考慮し、家庭も保育園に考慮できれば、新しい環境に適応するのが、少しでも、楽になり子どもの健康的な生活リズムを確立していくことができます。

担当制の条件・留意点

9・流れる日課の大切な視点

大切なことは、一人一人の必要性、今子どもが何を要求しているかです。一人一人の子どもの要求を私たちが、満たす事ができれば、私たちは、個人的な接し方ができていると言うことができます。このことを子どもに保障できることは、質の高い保育をしているという事です。

保育者に求められている事は、個人を尊重し、丁寧に育児行為をすることで、子どもの主体性を育てることに大きな意味があるのだと思います。

担当制の条件・留意点

10・担当制での空間の条件

A)食事の空間……食事の空間は、食器などが運びやすい場所であることと同時に、子どもが落ち着いて食べられる場所であることが大切です。(日課が子どもに合わせて考えており、部屋に子どもの発達や興味にあった道具が揃っており、子どもを見守る保育士がいれば、食事のコーナをしきる事や目隠しする必要はありません。

B)オムツの交換の場所……衛生面や大人の動き、大人と子どもが静かに落ち着いて、その時間を過ごせるためにも、遊びの空間とは、分かれた場所に交換台があることが理想的です。後に手を洗う習慣をつけていくためには、水道が必要となるので、一カ所にまとめるようにします。子どもが自立へ向かいながら行為をする助けになります。

生活リズムと睡眠

☆生活リズム

生活リズムとは、一日の生活の基本となる時間割である起床・就寝・昼寝・食事(朝食・昼食・夕食)登園などの基本的なリズムを作っていくことは、子どもの成長においてとても重要である。

☆生体リズム(体内時計)

人間の生物時間の周期が、25時間であることは知られている。この生物時間は、胎生期(胎児期)から動き始めている。生物時間25時間を一日の時間、つまり24時間に調整しているのが光である。最低体温(明け方)直後に光を目に受けることで脳内に覚醒作用が起こり、生物時間がリセットされる。生後間もない乳児は、授乳と3~4時間の睡眠を繰り返すが、3・4ヶ月頃になると朝起きる時刻と夜寝る時刻がほぼ一定してくる。これも光によって生活リズムが整ってくるからである。

光に当たる時は次のことを考慮すると良い。

- 1・目から入る光が体内時計の位相を変える。
- 2・光が当たる時刻によって体内時間は進んだり遅れたりする。
- 3・人間は、戸外の普通の明るさで体内時間に作用する。

食事のリズムと日課との関わり

☆眠る食べる遊ぶリズムから、遊んで食べて眠るへ

生理的機能が未熟なため、休息の多い乳児期です。しかし徐々に機嫌よく起きていられる時間が長くなり、あやされたり、抱かれたり、また空腹や不快など生理的欲求が満たされることで情緒も安定します。そうしたリズムは、園と家庭の24時間の流れの中で大人がつくります。食べて遊び、ほどよい疲れで眠るリズムにすると空腹と疲労感という2つの泣き出す原因をなくすことができます。普通食後2時間から3時間で空腹を感じますが、よく眠っている時は、感じないようです。よく眠った子どもは、しっかり食事ができ、その満腹感と満足感でより積極的に遊びに向かいます。遊び疲れて眠りにストンと入り眠っている間に神経の疲労も回復します。

クラスしての日課への移行

☆日課の基本をおさえて

日課を作成する上では、子どもの生理的なこと(食べること・眠ること)遊ぶことが、きちんとおさえられることがたいせつです。0歳児にとっては一日の生活は睡眠への保障を核にして、子どもの生理的要求をみていき、家庭も含めた24時間の生活も併衛生的せて観察していきます。したがって子どもの必要睡眠量と起きてられる時間を知る事です。

☆よく育つということは、よい教育が行われていること

- 1・基本的な生活の世話(食事・排泄・睡眠・着脱・清潔)などに関する事を中心に
- 2・物的な環境の条件整備(衛生的であること・家庭的であること・安全性の確保)
- 3・日課の組織(食べる・眠る・遊ぶを主要な日課お柱としリズムカルに交代する)
- 4・健康管理(身体の異常や病気などの早期発見と予防・適切な措置)

睡眠と生活習慣

☆子どもが、ベッドに入ってからまぶたが閉じてしまうまでの様子は、本当にかわいいものです。誰かに話しかけているように喃語でおしゃべりしたり、節をつけてひとりうたを歌ったり、自分の手足をながめたり、いじったり……。そんな子どもの姿はまるで、自分と対話しているように見えます。普段集団の中で緊張したり、萎縮したりして自分を出しきれない子どもでも、ベッドという自分だけの安心できる場所では違います。自分ではなかなか身体を動かそうとせず発達の遅れた子どもでも始めて寝返りをしたりつかまり立ちしたのもベッドの中ということもあります。みんなと一緒にだとあまり言葉がでないのに、ベッドに入ると(ママ・パパ・あった・ないなーい)と覚えたての言葉を何度も繰り返しながら寝入った子どももいました。眠ってしまうほんの少しの間に子どもの中にたくさんのものが育っています。ですから眠るための環境だけを整えたら自由に眠りまでの時間を過ごさせてあげることがよいと思うのです。背をトントンとたたいて無理に寝かしつけなくても(そばにいるよ)(安心しておやすみ)という気持ちを込めて見守っているだけで子どもは自然に寝入っていきます。時には身体にそ〜と触れていてあげたり子守りうたを小さい声で歌うこともあります。子どもは入園当初からすんなり眠ってくれる訳ではありません。子どもがおちつかったり、神経が高ぶったりしている時でも決して毎日ではありません。それが習慣になって、そのことなしで子どもが眠れなくなるのは、望ましくありません。子どもが小さければ小さいほど、その生活習慣の形成は大人の責任になります。